
「第4回特発性心室細動研究会」特集号の発行にあたって

特発性心室細動研究会(J-IVFS)代表幹事 平岡昌和
(東京医科歯科大学名誉教授・労働保険審査会)

特発性心室細動研究会(J-IVFS)では、Brugada症候群ないしは類似の病態を含む特発性心室細動の病態に関する全国的な規模での研究会を立ち上げ、調査研究、情報の交換と本病態の解明を目指して平成14年から活動を行ってきており、その症例の蓄積も200例を超えるものとなっている。この研究の主たる活動の一つである研究発表会は、1年に1度開催され、その際の発表内容は日本心電学会誌『心電図』の特集号として発行されている。本特集号は、平成18年2月に開催された第4回特発性心室細動研究会での発表内容が特集されたものであるが、今回は、男性に多発するとされるBrugada症候群の女性例に焦点をあてた「女性のBrugada症候群」と、しばしばその診断に用いられる「Brugada症候群における薬物負荷試験」をテーマとして取り上げて、それぞれの問題について発表と討議が行われた。「女性Brugada症候群」については、当初応募演題が集まるかが心配されたが、11施設から予想を上回る症例数の報告がなされた。その内容を見ると、男性例に比べて家族歴が多く認められるが、臨床症状としてはそれほど重篤でない症例が多いことが判明し、本症候群における性差に関して興味ある知見が得られている。「薬剤負荷試験」に関しては、それぞれの施設において、様々な角度からその有用性や特徴が検討されているが、まだ確定的な診断基準の確立までには至っていない現状が伺える。ただ、ヨーロッパ心臓病学会の不整脈グループが提唱した診断基準「Type 1のST上昇型心電図変化」が認められた場合に陽性とする判定には、我が国の症例では当てはまらない例がかなりの確率で認められるようで、今後さらに慎重な研究の必要性が痛感された。特別講演では、蒔田直昌先生に「Brugada症候群とその類縁疾患における遺伝子異常」について、先生の豊富な遺伝子解析とそれらの機能解析の経験を披露して頂き、参加者にNaチャンネル病の新しい概念と知識の整理・啓蒙をして頂いた。このように、本研究会における検討と全国の各医療機関に依頼している調査研究を通じて、Brugada症候群の病像の実態が少しずつではあるが解明の方向に進んでいるものと自負しており、Brugada症候群とその類縁疾患の診療と研究に取り組む方々にとって、本特集号が研究会の方向性と内容を理解する一助となることを期待するものである。

平成18年6月